

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	郷に病みて : 短歌
Author(s)	春瞳
Citation	龍南會雜誌, 162: 134-135
Issue date	1916-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6684
Right	

秋 五 首

英法一 鹽 谷 安 喜

木の葉散るさみちは暗し草かげにちさき蛇出て我に抵抗へり
黒き土踏みつけてゆく畑中の麥の小粒に生はありけり
沈黙の眞晝の光漲れる疊の上に蠅の舞ふ哉
野を行けば大いなる哉鳶の輪のめぐる下には高き木もなし
登る日の影うららかに今日しもぞ民彌仰ぐ日嗣立ちまして

(十一月三日立太子禮奉祝歌)

郷に病みて

一、二、丙 春

瞳

病床に秋海棠の葉の凋み見つめてあれば涙垂り來も
午さがりふとまごろみゆ覺ぬれば庭の柘榴のホと落つる音
病室の障子開かせしんみりとコスモスの花に見入るわれはも
かそけくも庭の落葉を掃く音の聞ゆるもよし病床にして
友はいまだイツの晝なご習ひ居らむ病む兒は秋の陽を浴びて居り
はりかへし障子明るく秋風の外の面を行くも心地よや朝

いま一たびかのいとけなき群に入り遊戯せまほしなやみもなくに
青黒く淀める沼を樹洩れ日の光りしら／＼うつる淋しさ
つゝましく野菊と並びわが犬は水の面の雲に見入るなりけり
秋の丘草叢行けば入りつ日に蛇の骸の薄光れるも
秋の丘段々畑の芋の葉に夕風そよぎて月出でんとす

(小學校を過りて)

習作三篇

二二、甲二

原

田

弘

海^〇の^〇唄^〇——

- わたつみはいと静やかに揺めきぬ黄金白銀朝日の昇る。
- 砂白し踏めば、いさごのすくさくとわが足跡の消ねもやらすも。
- かにかくに渚歩かむ一日をかくてすぐさば憂ひ消ぬべし。
- 月夜よし舟やるもよし歌ふよし今宵嬉しき波のささやき。
- その夜をば忘れざらめと歌日記筆そめにける寂び心よな。
- 海十裡いざり火遠くつゞきけり嬉し今宵の渚の聲の。
- 悲しみは藻の香する夜にはじまりぬその夜淡月潮鳴の宵。
- 銀の川南に流る戀ふ人を星に詠む夜の今宵の唄は。
- 淋しさは君のことばの少なくて吾が胸あまり暖かき時。